



くらもと・そう / 脚本家・演出家。2005年より閉鎖となった北海道富良野市内のゴルフコースを舞台に「C.C.C富良野自然塾」を開塾。ゴルフコースの自然返還活動と、環境教育プログラムを展開している。

地球に暮らす ④ 自然と住まう

脚本家の倉本聰さんに、地球環境と人の係わりを語っていただいた連載企画。最終回となる今回は、「闇」がテーマ。本来地球にあるべき本当の闇を知ることで見えてくることについて、うかがいました。

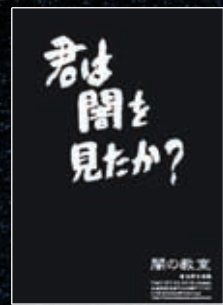
本当の闇を知るということ

私が主宰する富良野自然塾では、子どもや子どもを教育する立場の大人に向けて、環境教育プログラムを行っています。そのひとつに、「闇の教室」というものがあります。これは、一筋の光も差さない闇のなかでさまざまな体験をすることで、日頃意識できない五感やイメージーションの大切さを意識してもらおうというものです。これは、ドイツの「ダイアログ・イン・ザ・ダイク」というエンターテインメントプログラムを参考にしているのですが、そもそも私がこのプログラムをつくらうと

思った背景には、数十年前の闇の体験があります。それは、私が初めて富良野という土地にやってきた日の夜でした。まだ電気も引いていない一軒家は森に囲まれていて、生い茂る葉は月や星の光を完全に遮断していました。一寸の先も見えない「本当の闇」です。これまでに体験したことのない完璧な闇にさまざまな恐怖を覚えました。熊が来るのではないかと恐怖、得体の知れない霊的なものへの恐怖、そして、この闇がいつになっても溶けることがないので



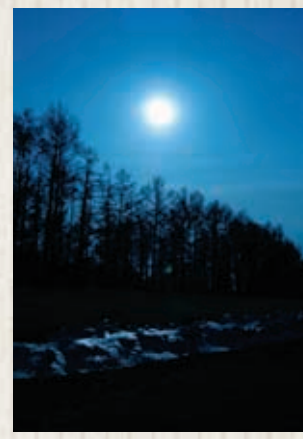
富良野自然塾のフィールドの木。木々も夜になると、昼間とはがらりと表情が変わる



「闇の教室」のポスター



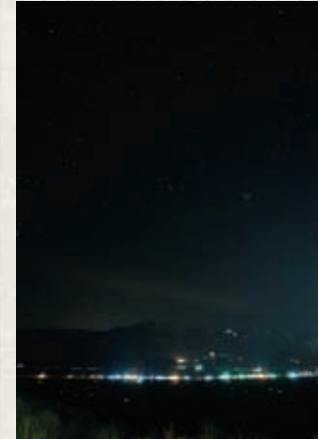
左 / 富良野自然塾のフィールドの夜に映える月 中 / 倉本氏主催の富良野塾でも入塾式に、電気も水道もない時代の生活を一日だけでも過ごそうと「原始の日」が行われる



はないかという恐怖。とにかく初めて闇を「恐ろしい」と感じましたね。ようやく鳥の音が聞こえてきて、外をのぞいてみたら、遠くの方が白んで森の輪郭が浮き上がり、太陽が昇ってきた。その光と熱を感じた時、すごくシヨックを受けました。「こんなに太陽が



左・右 / 富良野で行われたガイアナイトの景色



ありがたいものだったのか」ということと、その当たり前前がたさを忘れていたこともシヨックでした。闇の教室」でも、そのへんを感じてもらえればという想いもあるんです。

現在は街中に光があつて、本来の夜の暗さ、本当の闇というものがわからないし、光のありがたさもわかりづら。常に明るい状況に慣れすぎています。光にエネルギーを浪費しているから、光にエネルギーを浪費していることも気づかないんです。そんな考えもあり、洞爺湖サミットの際に、「ガイアナイト」というものを提案しました。一言で言えば「灯夜」。地球環境について行われるサミットだし、電気ではな

くろうそくのあたたかな灯火で各国の首脳を迎えようというものです。

ろうそくの光は闇や星空を輝かせ、元々あるべき原始の景色を見せてくれました。そういった質の高い景色、空間を持つことはもちろん、闇に向き合い、家族でひとつのろうそくを囲むという質の高い時間を持つことも、意義のひとつだと考えています。サミット後もこのガイアナイトは道内のおちこちで続いています。富良野でも行われましたが、まだ営業中の商店一軒一軒が、中の光が漏れないよう配慮するなど、とてもあたたかく素晴らしい景色をつくり出していましたね。(談)



富良野自然塾のフィールドと天の川。静かな闇が星を美しく映し出す